

二〇二一年二月二〇日(参加者一四名)

山門を額に黄落御堂筋	ひかり
照り翳るちりめん波や冬運河	"
棧橋を一列占拠百合鷗	"
信号を待てぬ人あり街師走	せいじ
年の瀬や芥をわけてぼんぼん船	"
年の瀬や人通りなき筋のなし	"
寒の水浴びて常ぬれ苔不動	よし子
裏木戸の軋なほして冬支度	"
冬木の芽いのち包みてふくらみぬ	"
留石の紐のゆるびて園小春	きづな
池よどむ银杏黄葉を散り重ね	"
極月の仮本堂に御本尊	"
歴日の翁の句碑に年惜しむ	菜々
庭落葉翁の句碑にしぐれけり	"
数へ日のひと日を主婦も心ぶらに	"
紅と白葉ボタンますぐ畝二本	こすもす
号外が師走の街を席卷す	"
蹠に落葉嵩知る雑木山	明日香

蒼天へすかし模様や枯木立	"
髪染めることもわたしの年用意	かれん
留石の縄ゆるむまま冬ざるる	"
鴨浮寝雨の水輪の間間に	はく子
なかなかその気にならぬ年用意	"
ポンコツの山と積まるる枯野かな	宏虎
懐メロは我が青春歌年忘れ	うつき
病院のロビー真中に大聖樹	ぼんこ
ゆりかもめ群舞して橋越へゆけり	有香

定例会の選

二〇二一年二月二〇日(参加者一四名)